



高崎能樹先生の 死を悼む

高崎能樹先生は去る二月七日午前十一時半、狭心症のため突如として七十三年の生涯を終えられました。その死顔は生前のやさしさをそのままに、今にもあの静かなことばをおもらしになるようでした。翌る朝納棺しましたが棺の中には園児たちがつくった折紙や切紙が沢山入れられて美しく、傍に立っていた画家の長尾己さんが、「ああなんときれいでしよう、こんなお棺を見たことがない」と声を上げられたほどで

した。その夕、火葬にし、九日午後二時から、先生の愛された幼稚園の遊技室で告別式がおこなわれ、名残を惜しむ人たちが千名以上も続きました、私はこの二日の司式をさせていただきました。

私が先生と親しく相知るようになったのは大正十年頃からです。当時、先生は日本基督教会日曜学校局主事をつとめられ、子どもの宗教教育のため全国の日曜学校を指導されていましたが、子どもへの話はうま

いものでした。またよい童話を作って出版されていきました。「子どもに聞かせたいお話」『鈴蘭』などの童話集など、自分で装って、までされていきます。その他数冊の童話の本を出されました。

ところが関東大震災後、大正十四年、私は雑司が谷から居を郊外の杉並の高円寺に移したところ、それから半年おくれで先生も同じ杉並の阿佐ヶ谷に幼稚園を開設されました。「先生、いつの間に幼稚園に変ら

れたのであろうか」と不審に思いました
が、伺ってみると、「おとなからではおそ
い、教育はどうしても幼児からでなければ
だめです。そこで思いきって幼稚園を始め
ました」という話。郷里の資産を処分して
背水の陣をしき、どこからの補助もまたな
いで始められたのでした。当時五十人位の
園児、私の長男もその翌年からお世話にな
りました。

私はこの頃の先生が一番好きです。園内
には鶏舎や大きな小鳥の飼育籠があつて、
その世話をされていた先生、近くのラッパ
の森やお伊勢の森に子どもたちを伴れて行
き一しょになって遊んでいた先生、夏には
信州や房州で子どもと共に暮した先生、冬
はたこ上げに興じて、よく上ったこの糸
を柱にくくりつけて原稿を書いていた先
生。実になつかしい。かしのち先生が多
方面に奉仕されるようになってからは、そ
ういう時を奪ってしまいました。

先生には多分にロマンチックなところが
あります。その点、倉橋惣三先生と共通な点

がありました。フレーベルを憧れていた先
生に当然なことだと思えます。先生がいつ
の間に幼稚園に変わったのか意外に感じた
と記しましたが、それは私の不敏であつて、
実は先生はそのための長い間準備をされてい
たのです。当時すでに児童心理の大著を出
していた上野陽一先生は義弟であつて、心
理学はそこから多くを学ばれたし、乳幼児
の心理については高島平三郎先生に就き、
またアルイン先生に乞うて恩物について玉
成保母養成所で聴講するなど、懸命の努力
をされていたのでした。

幼稚園は伸びてゆきました。しかし先生
の願ひは単なる幼児教育ではなく、宗教々
育がそれに加味しなければ真の人格形成は
できないとの主張でありましたので、幼稚
園と併行して教会の働きに力を尽されまし
た。一方、幼児の教育は同時に母親を教育
しなければならぬという願ひから、母の
会活動を盛んにし、これを全国的に拡げる
ため、月刊「子どもの教養」を先生の主
筆、私の編集発行により、十数名の同人の

援けをえて、昭和四年一月にその第一号を
出しました。それは非常な反響を呼んで、
そのために先生は東奔西走、休む暇もない
ほどでありました。

先生のお話は、実によく母親に訴えて、
その心をゆり動かしたものです。それは先
生の心のふるさとと体験から叫ばれるから
です。先生は明治十七年六月十七日、鹿兒
島県熊毛郡北種子村、高崎吉十郎の三男と
して生れたのですが、五才の頃、分家の
高崎能昌の養子となりました。能昌の妻キ
ヨ、すなわち先生の養母はすぐれた婦人
で、先生にとって慈母でした。この母のこ
とはよく聞きました。幼少時代、なかなかの
きかん坊があつたようになったのは、この母
の力が大きいと思えます。その話の一つ、
『私は幼い時から病弱でかんしゃく持ちで、
怒ったら前後の見分けもつかぬほどでし
た。ある晩何を怒つたのか原因は忘れまし
たが、怒つた部屋を飛び出し、庭のまん中
に大の字なりに寝ころびました。手には鉄
を持って誰か寄って来たら投げつけるつも

りでした。姉たちが驚いて母に注進しました。ところが母は、どれどれと気がるに縁側に出て、私のようすを眺めながら、能樹は星を眺めているんだ。星を眺める子は心の優しい良い子だ。お母様も星は大好きだよ。みんなお邪魔をしないでいなさいよ」といって、行ってしまいました。私は、星を眺める子は優しい良い子だ、との一言に不思議な満足感が胸にわき立ち、本気になって今度は星空を眺め始めました。そしてさきほどまで怒っていた自分が神の前に審かれているように感じ、急に不安になって飛び起き、母のもとへ行って、お母様ごめんさいとお詫をした。母はそのとき、やはりお前は心のやさしい良い子だね、と行って私を赦してくれました』云々。先生がよく使われたことばに、「母は神の代行者、母心をもってすべてを育てよ。」というのがありました。その言にはこの母に由来するところもあったでしょう。

明治卅三年上京して義兄の家から独逸協会中学校に入學し医者になるつもりでし

た。ところがもともと子ども好きだったので、毎日大勢の子どもと遊びくらしただめ、親族たちの問題となり、以後、いっさい子どもと遊んではならぬとの禁止令が出ました。そこで止むなく誘いに来る子どもたちから姿をかくしていましたが、ある日いどころを突き止められ、戸山が原に連中をつれだして事情を話した。しかし子どもたちは黙ってきいていませんでした。そのことから、「私は一生を子どものために生き、子どものために働こうと決心し、医者たるべき進路を変えて、親族会議の厳命にこれだけは反抗して一生を貫かれた」のでした。

昭和十六年九月、「子どもの教養」は統制に遭ってやめさせられました。私は涙でその命令をききました。また時局の切迫は先生たち何人かの代表者を招いて幼稚園の閉鎖を命じました。盛んであった幼稚園も火の消えたようになり、加えてひとり息子は戦場に送られた、畑にささやかな野菜作りをされていた先生と奥様が目に浮びます。しかし先生の幼児教育の熱意は少しも衰え

ませんでした。戦が終わるといち早く活動を始められました。そして阿佐ヶ谷幼稚園はすでに卅二年を經過し千数百名の修了児を出し、母親教育のため設けた母の学校は昭和十一年から今日まで続けられています。また戦後、尚綱短大や東京幼児専修学校、その他で保育学を講じられました。これだけはずびまとめておきたい、と昨秋、星野温泉で同宿したとき話されていましたが、どうなっていることでしょうか。先生はどこらかといえれば実際問題と取組んで、それを学問の上で証明しようと思われたかたです。それだけにそのいわれることに自信をもっておられました。

こういうタイプの方がなくなりつつあるような気がします。ほんとうに惜しいと思います。(武南高志)

× × ×